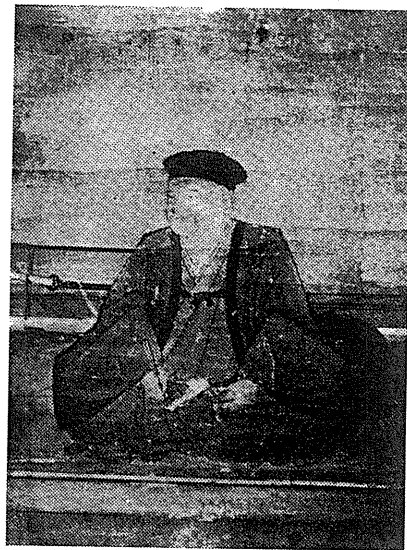


西嶋八兵衛と満濃池の修築

西嶋八兵衛の事績

西嶋八兵衛は伊勢国の津藩の藩士で、生駒藩に招かれて讃岐へ赴き、国奉行として生駒藩政に重要な役割を果たしたが、とくに讃岐の各地にため池を築いた人物としてよく知られている。西嶋八兵衛は之尤（のち之友）といひ、慶長元年（一五九六）遠江国の浜松で生まれた。かつて父九郎右衛門之光が藤堂高虎に仕えていたところから、慶長一七年（一六二二）に津藩主となっていた高虎の近習に取り立てられ、五〇石を禄した。慶長一九年（一六一四）の大坂冬の陣、翌元和元年（一六一五）の夏の陣では藤堂高虎は徳川方につき、西嶋八兵衛は記録方を勤めた。この時五〇石加増されて知行二〇〇石になった。元和五年（一六一九）に高虎は幕府から京都二条城の縄張（設計）を命じられたが、八兵衛は二条城設計絵図面を作成している。またこの年大坂城普請が始まり、西



西嶋八兵衛画像

嶋八兵衛は「普請の見積り」を命じられている。これ以後一〇〇石加増されて三〇〇石となった。（「高山公実録」）この頃八兵衛は土木技術者としての力量を認められ、それを発揮し始めているのがわかる。

元和七年（一六二二）に生駒藩第三代藩主生駒正俊は急逝した。正俊の正室の父藤堂高虎は、正俊の子高俊がまだ一一歳であったので生駒藩政を執るとともに、「讃岐の仕置」のために西嶋八兵衛を讃岐へ派遣した。程なくして八兵衛は津へ帰ったが知行五〇〇石を与えられた。寛永元年（一六二四）に讃岐は早魃となり、「大日焼二付讃岐亡国ニ成申候、何とそ精を出し国を取立候へ」と命じられて再び讃岐へ赴き、三年間ため池の築造など農村の建て直しに取り組んだ。寛永六年（一六二九）藤堂高虎の命により江戸へ赴き五〇〇石加増されて一五〇〇石となった。同年三たび讃岐へ派遣され、五〇〇石加増されて二〇〇〇石となり鉄砲者三〇人を添えられた。（西嶋八兵衛文書）寛永一六年（一六三九）津藩へ帰っているが、これは生駒騒動にまきこまれたからであろう。生駒高俊改易後、讃岐へ派遣された幕府の上使の案内役として讃岐へきている。

西嶋八兵衛はため池の築造や、高松城下東浜から屋島にかけての海浜を埋めて新田干拓を行ったり、高松城下へ流れ込んでいた香東川をせき止めて西側の水路一本（現香東川）にしたことなど、土木水利の方面で多くの貢献をしているが、同時にかれは国奉行として藩政の要職にもあったのである。寛永五年（一六二八）正月に出さ

近世

れたある地域の年貢率をきめた免定状に、西嶋八兵衛が三野四郎左衛門・浅田右京・疋田右近らとともに署名しており、かれら四人が当時国奉行であった。のち寛永二年（一六三五）一〇月からは西嶋八兵衛と小野木十右衛門、翌三年（一六三六）九月にはこれに市原惣右衛門が加っており、この三人の署名した免定状は寛永一五年（一六三八）一月まで続いているのを確認できる。（有馬家文書）そして寛永一六年（一六三九）三月作成の「生駒藩分限録」に国奉行として西嶋・市原・小野木の名があり、この頃まで国奉行であったのがわかるし、西嶋八兵衛も当時まだ在讃していたのである。このように寛永五年（一六二八）から一六年（一六三九）までのほぼ一〇年間生駒藩の国奉行の要職にあつて、土木水利技術者としてのみでなく、生駒藩政の中心人物として活躍していたと思われる。

満濃池の修築

西嶋八兵衛の行ったため池の築造の中でもっともよく知られているのは満濃池である。満濃池は大宝年中（七〇一〜七〇三）に築かれたといわれるが、弘仁九年（八一八）に洪水により堤防が決壊したため、当時京都にいた讃岐国多度郡出身の高僧空海が派遣された。そして弘仁十二年（八二二）に空海は満濃池の修築を完成させた。しかしその後もしばしば決壊したが、元暦元年（一一八四）の決壊以後は修築されることもなく放置され、池底には池内村とよばれる集落もできた。寛永初年頃は池内村には二〇余戸あり、村の石高は三五〇石であった。

「満濃池古池図」の注記によると、寛永三年（一六二六）八月に西嶋八兵衛が矢原正直方へきて、多度郡の毎年の早損について相談したので、正直は池内に所持していた田地をすべて差し出したという。矢原正直は現善通寺市文京町の讃岐宮香川県護国神社宮司の矢原家の先祖である。満濃池の築造工事は寛永五年（一六二八）一〇

月に始まり、寛永六年（一六二九）中は大石の割取り除きに費し、寛永七年（一六三〇）に入つて四月より底樋工事にかかり、七月に底樋を完成させ、一〇月からは堅樋ができあがり、寛永八年（一六三一）二月にすべての工事を完了した。約二年半にわたる長期間の工事によって満濃池は完成したが、堤の長さ四五間（八二尺）、深さ一一間（二〇尺）、池の長さ南北九〇〇間（一六三〇尺）東西四五〇間（八二五尺）、池の廻りは四五〇〇間（八二〇〇尺）であった。現在の満濃池（堤長さ一五五尺）に比べると小規模なものであるが、当時にしては一大土木工事であり、大池の出現であった。矢原家には次の文書が現存しており、満濃池完成後の寛永一二年（一六三三）に西嶋八兵衛と浅田右京の連名で矢原家が五〇石を永代に与えられ、満濃池の監視役を命じられているのがわかる。

以上

為^二御意^一令^レ申候、仲郡満濃池上下二而、高五拾石永代^二被^レ遣候間、常々仕かけ水堤まハリ諸事無^二由断^一指図仕、堅可^二相守^一者也、仍如^レ件

寛永拾貳年 四月三日 西嶋八兵衛 之尤（花押）

浅田 右京 直信（花押）

矢原又右衛門殿

満濃池の水懸り

満濃池の完成によってその水懸りとなった村は（次表参照）、寛永一八年（一六四一）時は那珂郡二一カ村・高一万九八六九石、鵜足郡八カ村・高三一六〇石、多度郡一七カ村・高一万二七八五石二斗で、計三万五八一四石

二斗であり、三郡に誇る広大な地域へ満濃池の水が利用されることとなった。善通寺の村々はすべて水懸りとなっているが、そのうち金蔵寺村・木徳村、それに原田村のほぼ全地域が水懸りであり、次いで吉田村・善通寺村が水懸りの多い村となっている。当時善通寺地域の全村高一万九〇三八石余のうち、一万二五八七石が水懸りであり、全村高の約六六割となっている。

なお、多度郡大麻村の水懸り五〇〇石のうち三〇〇石は「所ニテ替水」と記されているが、これは大麻村と与

寛永末善通寺村々の村高と水懸高

	村 高 (寛永17)	水懸高 (寛永18)
那 珂 郡		
金 蔵 寺	831石 4斗	831石
原 田	1,702 4	1,693
木 徳	1,923 1	1,933
楠 梨	1,902 9	630
与 北	1,482 6	500
多 度 郡		
吉 原	1,743石 4斗	700
弘 田	1,389 0	900
中 村	1,286 6	700
善 通 寺	1,722 2	1,000
吉 田	1,831 1	1,700
生 野	1,877 7	700
大 麻	808 1	500 <small>(^{300石ハ所ニテ} 替水ニ罷成候)</small>
計	19,038 4	12,587

「惣高覚帳」・「水懸り高覚書」(写、鎌田図書館蔵)より

北・楠無両村との間に毎年行われていたことで、大麻村の満濃池の番水を与北・楠無へ廻し、与北・楠無からは両村の出水である「野田みたの井手」の水を大麻へ廻していた。なぜこのような「替水」を行っていたのか明らかでないが、満濃池が満水になった場合には「野田みたの井手」をせき止め、与北・楠無に水を取り、大麻へは渡さなくてよいともいつており、満濃池の水量と関係していたようである。つまり満濃池の水量が不足している時には番水が大麻村まで廻らないために、「野田みたの井手」から出水を「替水」したのであろうか。「野田みたの井手」の場所は不明であるが、『西讃府志』によると、幕末の頃に苗田村から楠無村の西辺を北へ野田川が流れて

おり、この野田川と関係があるのかもしれない。(以上、「満濃池水懸り高覚書」写)